海外レポート

UIAコペンハーゲン・コングレス参加報告 vol.1

2023年7月2日～9日　デンマーク・コペンハーゲン

■コングレス参加者

●JIA代表団
佐藤尚巳（JIA会長）
国広ジョージ（UIA評議員立候補者）
竹馬大二（JIA国際委員長）
藤沼 傑（JIA国際委員、UIA・Professional Practice委員）
岩橋祐之（JIA国際委員、UIA・SDGs委員）
坂田 泉（JIA国際委員、UIA・Social Habitat 委員）
高階澄人（JIA国際委員会アドバイザー）
柳澤 要（UIA・Architectural Education 委員）

●MANIFESTO RELAY COPENHAGEN 2023参加者
慶野正司（関東甲信越支部）
所 千夏（近畿支部）
漢那 潤（沖縄支部）

●Golden Cube賞発表会および表彰式参加者
福口朋子（有限会社 設計機構ワークス）

■テーマ
SUSTAINABLE FUTURES | LEAVE NO ONE BEHIND

コングレスとUIA総会概要

竹馬大二（JIA国際委員長）

●コングレス概要

SUSTAINABLE FUTURES | LEAVE NO ONE BEHIND（持続可能な未来—誰も置き去りにしない）というテーマの下、135カ国から6,000人以上の参加者が集ったコペンハーゲン大会では、約500人の講演者による150のセミナーセッションが開催された。また、250の学術論文の発表、市内各所での建築の展示会や建材メーカーによる見本市が併せて開催された。JIAからはメイン会場に『SDGs建築ガイド日本版』をA0パネルにして展示を行った。

日本からは上記8名のJIA代表団、3名のマニフェストリレー参加者、1名のゴールデンキューブ賞参加者からなる合計12名がコペンハーゲンに集い、それぞれの立場で多様なイベントに参加した。また、4日目にはセッションの合間に設計事務所訪問（BIG社とSHL社）も行った。

セッションでは国境や世代を超えて、著名な研究者や実務家が、気候変動と闘い、生物多様性を増加させ、社会的包摂を促進するために、どのようにデザインできるかを議論した。大会の最後には、下記の「コペンハーゲンの教訓」と題された、建築環境における急速かつ根本的な変化のための10箇条の原則が採択された。

01：すべての人の尊厳と主体性は建築の基本であり、排除は美に反する。
02：建築環境を建設、計画、開発する際には、取り残される恐れのある人々にまず配慮しなければならない。
03：既存の建築物は常に再利用されなければならない。
04：新しい開発によって緑地が消えてはならない。
05：自然の生態系と食糧生産は、建築物の状況に関係なく維持されなければならない。
06：再利用が可能な場合は、建設にバージン鉱物を使用してはならない。
07：廃棄物を出さない。
08：建設資材を調達する際は、地元の再生可能な資材を優先する。
09：私たちが建設するすべてのものにおいて、二酸化炭素の吸収量がカーボンフットプリントを上回らなければならない。
10：建築環境を開発、計画、建設する際には、あらゆる活動が

会場内の様子

■行程

7/2(日)	17:00～21:00	コペンハーゲン市庁舎でWelcome Reception
7/3(月)	09:00～18:00	オフィシャルプログラム（レクチャー等）
	13:15～15:45	Golden Cube賞作品発表会
	15:00～16:00	バングラデシュ建築家協会主催セミナー登壇（佐藤会長）
7/4(火)	09:00～18:00	オフィシャルプログラム（レクチャー等）
	09:00～10:30	パネルディスカッション登壇（国広ジョージ、坂田泉）
	10:30～12:00	マニフェストリレーパネルディスカッション
	18:00～19:00	スペイン大使館レセプション
	18:00～19:00	NCARB代表団との面談
7/5(水)	08:30～10:30	Social Habitat委員会（坂田泉）
	09:30～11:00	BIG社訪問
	11:30～14:00	SHL社訪問
	15:00～17:00	CAHR主催ROUNDTABLE（国広ジョージ）
	18:30～22:00	Farewell Party
7/6(木)	10:30～14:00	閉会式、各種授賞式
	15:30～17:30	UIA総会
	19:30～21:00	BIG新社屋見学
7/7(金)	09:00～17:30	UIA総会
	18:00～20:00	IAB主催レセプション
7/8(土)	09:00～17:30	UIA総会
7/9(日)	09:00～12:00	UIA総会

水の生態系ときれいな水の供給に良い影響を与えなければならない。

●UIA総会での主な討議内容

総会の3日目に行われたUIA執行部の選挙が今回の総会のメインイベントであった。会長職にはアジア4名、アフリカ1名、ヨーロッパ1名の計6名が立候補し、Regina Gonthier氏（スイス）とPei Ying Tang氏（マレーシア）による決選投票の結果、Regina Gonthier氏が2023-2026期の会長に選定された。アジアからは、Rui Leao氏（マカオ）が事務総長に選ばれた。また、JIAが所属するRegion-4の代表（副会長）には中国のZhang Li氏が選出され、このRegionの評議員に立候補した国広ジョージ氏（代理評議員：高階澄人氏）は無投票で無事選出された。

上記以外には、会計報告および各委員会とWork Programの活動報告が詳細になされたが、ここでは割愛させていただく。なお、バルト3国（ラトビア、エストニア、リトアニア）はロシアが未だにUIAに所属していることに対する抗議を行い、その決意を表明するためなのか、UIAからの脱退を宣言するという一幕もあった。

（ちくば だいじ／日建設計）

バングラデシュ建築家協会主催セミナーに佐藤会長が登壇

基調講演等

藤沼 傑（JIA国際委員）

UIAコペンハーゲンでは約150ものセッションで約500人が講演した。基調講演など主なものは、UIAサイトから動画視聴が可能となっている。

https://www.youtube.com/channel/UCsL10ekxXuPhfcl839vjQLQ

本大会はSDGsが主要なテーマであるが、17項目すべてを対象とするのではなく、6分野、気候変動対策（Climate change adaptation）、資源再考（Rethinking resources）、強靭な社会（Resilient communities）、健康（Health）、包括（Inclusive）、改革のための協働（Partnership for change）について基調講演が編成されていた。

最初の基調講演は、欧州委員会競争政策担当委員Margrethe VestagerとBIGのBjarke Ingelsが大会のテーマについて講演し、パネルディスカッションした。

Margretheは、欧州の政策について概説。欧州の見方が正しいものではないかもしれないが、気候変動対策の知識として聞いてほしいという説明から始めた。欧州では、建築に関しては新欧州バウハウスとして、持続性（Sustainable）、包括（Inclusive）、美（Beauty）の3方針で政策を進めている。持続性において重要なことは、新築ではなく改修を主体とすること。改修プロジェクトを倍増していく。包括では、誰もが負担できる場所の構築。エネルギー価格を負担できるようにすること。そして、美とは、人間として穏やかな（serene）生活を営めること。そして何よりもアカデミーにより、気候変動対策に関する教育研修啓蒙活動を展開していくことが重要と説明した。

Bjarkeは、気候変動対策という必要性が社会改革を促進するすばらしい機会を与えているという言葉から始めた。さらに、快楽主義的にアプローチすれば持続性は担保できるという（Hedonistic sustainability）。水がきれいになれば、皆が飛び込むし、ごみ焼却場を登ったり滑ったりできるようにすれば、皆が喜ぶと。ちなみに、100億人がデンマークと同等の生活水準で地球上に持続的に住めるかをシミュレーションしたところ、既存技術で全く可能であると説明した。この説明がビジュアル的に分かりやすいので、ぜひ動画を見ていただきたい。

パネルディスカッションでの発言で印象に残った発言は以下の通り。

Margrethe:「産業革命など、これまでの社会革命は、技術主導だった。その恩恵を受けた人は少数で、公害などで多くの人が苦しんだ。今回の気候変動対策は、政治主導で、皆がパリに行き、気候変動対策を承認した。この革命は全ての人に恩恵をもたらす」

Bjarke:「建築家は、その権限外のことで最も批判されやすい職業である。多くのことは、建築家以外の人が決めてしまっている。建築家は、せいぜいより良いものを選択できるようにするだけで、実際の判断は建築家以外の人がしている。我々は最初の事例を作っていくしかない」

Margrethe:「グローバルな気候変動対策を計画している時間などはない。既に気候はこれ以上悪くなる可能性が高く、良くなる可能性はない。個々の人が個々の組織で中央集権ではない民主的な手法で、できることを実行するだけ」

Bjarke:「モデリングやシミュレーションにより、長期の影響が分かりやすくなったこと。投資家の財務指標に記載されない外部効果（Externalities）も簡単に俯瞰できるようになったこと。この2つが持続可能な社会への強力な説明ツールとなっている」

Margrethe:「悪習に課税する方が、善行に補助金を出すより、政策的な効果が高いことが欧州では実証されている。欧州では、炭素税などを積極的に導入している」

Bjarke:「建築家は新聞の三面記事ではなく、政策判断と直結する一面を目指すべきだ」

このように、UIA大会セッションは情報量が多く、わかりやすい。YouTubeでは、字幕自動翻訳機能により、日本語字幕が可能なので、ぜひ視聴していただきたい。

（ふじぬま まさる／ウィスト建築設計）

パネルディスカッション

展示関連

岩橋祐之（JIA国際委員）

●教育／職能／ SDGs委員会合同の展示

各国の展示が並ぶオープンな展示スペースにおいて3つの委員会合同での展示ブースを設置。JIAからは各委員会に1名ずつ委員として参加している。

●SDGs委員会活動とガイドブック

UIA大会の事前の公募によりUIAの「SDGs建築ガイド」の第3弾の企画があり各国から147案が寄せられ、85案が選定された。JIAの応募からは高階氏の案がゴール12（作る責任）で選定された。この選定においてはTool Boxが活用されたが、SDGsの各ゴールごとの詳細なクライテリアを表形式であらかじめ用意されたBoxにマークを入れると点数が集計されるシステムで、フランスのYves Monnotが作成した。今回の展示ブースは討論の会場でもあり、このTool BoxについてYves Monnot本人からの説明が行われた。

展示エリアに設けられた特設会場

●展示スペースにおけるJIAの展示

JIAからの展示は『SDGs建築ガイド日本版』の17のゴール別の全50プロジェクトをパネル形式に編集して展示を行った。

これは上記のUIAの「SDGs建築ガイド」の2018年の第1弾の発行に応じて日本の事例から2019年に作成したもので、タイやブラジルなど各国の建築家大会における展示の要請がありパネル用のデータ編集の準備はしていたが、その後コロナの影響で展示は各国とも中止となり、2023年4月になってようやくタイで展示し、そして今回のUIAでの展示となった。

JIA『SDGs建築ガイド日本版』の展示

●展示スペースにおける各国の展示

多くの国の展示では、環境配慮の自国の建築作品を展示しており、特に中国からは他国の10倍ほどのスペースを使った多くの作品が展示されていた。

中国の展示

チェコの展示

香港の展示

ウクライナの展示

●ゴールデンキューブ賞の展示

上記の各国の展示がされたエリアに加えて、「UIA Architecture & Children Golden Cubes Awards, 5th Edtion」（「UIA建築と子どもゴールデンキューブ賞」）の受賞作品の展示も行われており、日本からは「藁小屋造りを中心とした体験型学習～「円庭」づくりの一環として～」が最優秀賞の受賞作品として、また「SDGsスーパーシティゲームの開発～まちづくりを通じたSDGsの加速～」が特別賞の受賞作品として、展示された。

ゴールデンキューブ賞受賞作品の展示

（いわはし ゆうじ／日本設計）

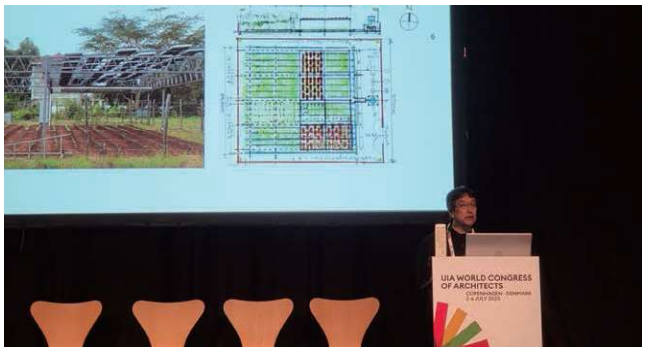
委員会活動

RIBA “Global Architecture Exchanges” “UIA Social Habitat Work Programme”

坂田 泉（JIA国際委員、UIA Social Habitat 委員）

●RIBA “Global Architecture Exchanges”

7月4日㈫、英国王立建築家協会（RIBA）主催の「Global Architecture Exchanges」に登壇。「Carbon and Beyond」をテーマに、オーストラリア、オランダ、中国、ニュージーランド、日本、ブラジル、米国、韓国、アイルランドの9ヵ国からの建築家と共にプレゼンテーションを行った。私は、ケニ



RIBA“Global Architecture Exchanges”

アのジョモ・ケニヤッタ農工大学と2015年から実証している「Urban Solar Farm（都市型発電農園）」プロジェクト（『JIA 2050 カーボンニュートラルへの提言集』にも応募）について発表。建築や都市をテーマにした発表が多い中、二酸化炭素の「貯留庫」としての土壌の可能性や「炭素貯留型農業」に着目した点が注目された。

“UIA Social Habitat Work Programme”

● “UIA Social Habitat Work Programme”

7月5日㈬は、「UIA Social Habitat Work Programme」のセッションに参加。このプログラムは世界5地域（西ヨーロッパ、東ヨーロッパ・中東、北中南米、アジア・オセアニア、アフリカ）の20カ国、23名のメンバーから構成され、今回は、コペンハーゲンに来訪した6カ国（フランス・イタリア・ブラジル・トルコ・日本・ナイジェリア）のメンバーが自国の「Social Habitat（社会的住宅）」について発表。私は、日本の社会的住宅の「過去・現在・未来」を概観する形で、「過去」では戦後復興期の公団住宅、「現在」では東日本大震災後の「福島県復興住宅」、そして「未来」では、福島県復興住宅の「厚肉床壁構造」を活用したアフリカでのアフォーダブル住宅へ向けた私たちの取り組みについて発表した。戦後復興から高度成長期を経て一定の役割を終えた日本の社会的住宅は、自然災害からの復興支援に住宅供給の軸足を移したが、その技術的資産というべき厚肉床壁構造をアフリカの住宅支援に活用しているという文脈は、参加者の関心も高かったように思う。

（さかた いずみ／一般社団法人OSAジャパン）

建築家職能委員会（Professional Practice Committee）

藤沼 傑（JIA国際委員、UIA Professional Practice委員）

今期はリオ大会が1年遅れたので、2021年9月から建築家職能委員会（以下PPC）の活動が始まり、実質2年弱の活動となった。コロナの影響で全てがオンライン会議であったため、今回初めて各国の委員と会えたのが最大の成果である。大会では、教育委員会とSDGs委員会との共同ブースとし、20席程度の空間で、1時間程度のセッションを1日5回程度、合計20弱のセッションを3委員会で開催した。

PPCの主なセッションは、まずは総会で採択されたDEI（多様平等包括）について。設計事務所の所員構成のDEIだけではなく、受けるプロジェクトのDEI、設計する内容のDEIについて協議した。また、災害後の建築家活動についてネパール、コロンビアなどを中心に資料がまとまり、その発表もされた。

PPC内部の協議としては、各国建築家資格制度概要（APAW）データベースの整備、UIAアコードを遵守した資格制度の調査と普及、施主との建築設計監理標準契約書の整備などについて協議した。今回はアメリカのNCARBが多数参加したため、AIAも含めた職能制度に関する協議も行われた。James委員長は総会でPPC活動報告をした。質疑回答において、各国の建築家協会が建築資格制度をUIAアコードに準拠させるように政府にいっそう働きかけていく必要があると回答した。

各国の委員が集まって記念撮影

（ふじぬま まさる／ウィスト建築設計）

教育委員会（EDUCOM）「持続可能な未来のための建築教育」

柳澤 要（UIA Architectural Education委員）

UIA教育委員会（EDUCOM）の共同ディレクターであり、ユネスコ・UIA建築教育検証評議会の共同報告者でもあるメリーズ・R・ネポメキ氏（米国）とアシュラフ・M・サラマ氏（エジプト／英国）が、「持続可能な未来のための建築教育」をテーマに、2部構成でオープンフォーラムを共催した。

第1部は、共催者による「建築教育の未来形成と、その未来形成におけるユネスコ・UIA憲章とバリデーションシステムの役割」に関するプレゼンテーションで、バリデーションの主な基準、UNESCO-UIA憲章とバリデーション・システム・マニュアルの主な最新情報、各校の現在の取り組み、UIA教育委員会と評議会の今後の抱負が紹介された。ユネスコ・UIAのバリデーション・プロセスと経験に焦点を当て、ハンガリー、トルコ、アラブ首長国連邦の現在ユネスコ・UIAのバリデーションを受けている学校の中から代表的なプログラムのディレクターが参加した。またUIAのシステム・マネージャーも参加し、バリデーションに関心のあるプログラムの質疑応答も行われた。

オープンフォーラムの様子

第2部では、北半球と南半球の両方における持続可能な開発目標を建築教育学に取り入れる現在の取り組みについて意見を交換した。共同主催者の司会のもと、主要ゲストスピーカーであるヤーナ・レヴェディン氏が講演し、気候危機に対する潜在的な対応について概説し、効果的な教育実践を可能にする理想と原則の支援のために、それらを建築教育学にどのように統合できるかを説明した。

（やなぎさわ かなめ／千葉大学大学院）